

氏 名	やまぎし つねお 山岸 恒雄
学 位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲 第19号
学位授与年月日	平成22年3月13日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論文題目名	ポール・セザンヌと富岡鉄斎 —両者絵画の同質性について—
審査委員	主査 倉澤 行洋 副査 加藤 勝久 同 関 隆志

一、論文内容の要旨

本論文は

第一章 本論の目的

第二章 研究の方法と基礎資料

第三章 セザンヌの自然観

第四章 鉄斎の実像

第五章 両者絵画同質性の由縁

の全5章より成り、巻末に

参考文献一覧

セザンヌの手紙索引

鉄斎の画譜索引

創作との関連について（あとがきに替えて）

が付載されている。

以下に論者自身による各章の概要を掲げる。

第一章 本論の目的

本論の目的は、セザンヌと鉄斎の絵画の同質性が、何に由来しているのかを明らかにすることである。

この同質性については、タウトや瀧拙庵らが指摘しているところであり、論者もそれを強く感ずる。しかし、その由縁については、今まで誰も言及していない。

本論は、できる限り事実によって、これを解き明かそうとするものである。

第二章 研究の方法と基礎資料

両者の直接的な影響関係は認められないので、研究の方法は、二人の画家の生い立ち、個性、思想、芸術観などを考察し、その中に答えを求めて行くこととした。それを、画家本人の言葉という、事実に基づいて、考察しようと考えた。

セザンヌについては、書簡集『セザンヌの手紙』を精読することを、研究の柱とした。そのほかに、ベルナルなど、セザンヌと直接交流のあった人たちの著書を補足資料とした。

鉄斎については、画賛の研究を柱とした。鉄斎絵画には、殆どの場合、自賛が施されており、画家自身の言葉として重視した。基礎資料として、鉄斎画賛の注釈書『鉄斎研究全71号』を用いた。その他に、弟子本田成之の著書と、鉄斎の残したメモ類や書簡などをまとめた、富岡益太郎の『鉄斎年譜』を、補助資料とした。

第三章 セザンヌの自然観（セザンヌの研究）

『セザンヌの手紙』から、六十九通の手紙を取り上げて吟味した。そこに浮かび上がって来たのは、セザンヌが、東洋的な自然観を持っていたという、予期せぬ事実である。『セザンヌの手紙』という書物は、彼の絵は晩年になって、ようやく少し理解されるようになったが、その絵を裏づけている彼の自然観は、まさしく東洋的であるということを物語っている。

なぜ、セザンヌが、そのような自然観を持ち得たのかについては、まず、セザンヌの長く濃密な自然との接触を、上げなければならない。セザンヌが、自らの絵画上のテーマを「自然の研究」と定めてからは、ますます自然の中に入って行った。

「自然の研究」とは、「自然を前にして、自分の一切を忘れ、それによって湧き起る感覚をキャンヴァス上に実現させる」というものである。彼は、「自分には、そうした感覚がはつきりとあるのだが、その実現には、なかなか到達できない」と死ぬまで言い続けている。自然の研究とは、自然から学ぶということであり、彼の自然観は、自然から直接学び取ったものと言える。

西洋文明の中で、彼が、人間より自然を上位に置くような考えを、説明すればするほど、周囲から理解されなくなり、絵も不気味なもの、反逆的なものと見られた。そのようにして社会的に孤立したことが、反面、彼をして一層自然を求めさせることになり、自然観の形成を後押ししたことも事実である。

ガスケの著作は、セザンヌが、ショーペンハウエルの哲学を通じて、東洋思想に触れた可能性を示している。但し、それは、セザンヌが、既に、その自然観と芸術観を確立させた後のことと考えられ、影響があったとしても限定的であろう。

彼の幾つかの難解とされる絵画理論も、セザンヌがそのような自然観に立って、絵を描いていたことが分かれば、十分説明できる。

第四章 鉄斎の実像（鉄斎の研究）

鉄斎が、本音を吐露していると思われる画賛の数々を吟味すると、「儒者を標榜しながら、神官でもある」という鉄斎の実像が浮かび上がってくる。

鉄斎は、自らを画家ではなく、学者であると言い続けた。その学者としての専攻は、儒学、中でも陽明学であった。実際に、二十七歳で学塾を開き、以後学者の立場を通してゐる。

一方、神官としての鉄斎は、神社をベースとして身を立てるよう、早くから方向づけられ、八歳のころ神社に出され、十五歳の時に国学を修めている。彼にとつては、儒学より先に国学があつた。壮年期には、社格の高い神社の、神官を務めている。その後も、各地を旅しながら、神社の修復や復興に、尽力しており、一生を神道復興に捧げているという見方もできる。

二足の草鞋を履いているような、鉄斎のこうしたあり方は、富岡家の家学であつた石門心学が、神道、仏教、儒教の融合を説いていることや、陽明学が、儒・仏・老の三教兼修を唱えていることに関係があると思われる。しかし、それ以上に、すでに鉄斎の血肉となっている、神道的な器によって、大陸伝来の儒・仏・老を受け入れ、鉄斎の内部で、統合していると考えられるのである。本居宣長は、神道の神の概念について、「何なににまれ、尋常よつねならず、すぐれたる徳とくのありて、可畏かしこき物を、迦微いとは云いなり」としている。大層おおらかであり、日本に八百万の神々が存在する所以である。鉄斎のベースは、ここにあつたものと考えられるのである。

鉄斎は、広く三教を説くことを、旨としているが、彼の三教とは、このような神道の器をもって、儒も仏も老も、可畏かしこき物として受け入れている、そのような構造を持ったものであつたと考えられる。

鉄斎の人物像は、そのように捉えることができるが、絵画を語る上で、欠かせないことは、鉄斎が、「万巻の書を読破し、万里の路を踏破した」事実である。薰其昌の気韻論を、実践しているのである。万巻の書の中で得た知識や感動を、万里の路を行くことによつて、自らの自然に照らして、真実にまで昇華させたもの、それが、彼の絵である、言えるのではないか。また、鉄斎は、王陽明の「掃俗塵」を画道修業のテーマとしているが、俗なる自我を滅却したあとに現れてきた鉄斎の自然は、神道的な八百万の神々が宿る自然であつたものと考えられる。

第五章 両者絵画同質性の由縁（比較考察と結論）

ここまで、個別に見てきた、両者の特徴を、人物対比表におくという形で連結させ、比較考察した。

社交性や、絵と文学に対する考え方など、対照的な項目の多い中、両者に共通するものとして残ったのが、次の5項目である。

最初に、(1) 自然とのつながりである。

セザンヌと鉄斎の、芸術上の共通点は、俗なる自我を滅却することによって、見えてくる、自然の本質を、描こうとしたところであろう。そのことを長く濃密な自然との接触によって成し遂げたことである。

セザンヌが自然を求め、自然と一体化しようとする切実な姿に比べれば、そのことを、言わば当然な前提とする鉄斎の姿は異なって見える。鉄斎にとつては、自然と一体の自己をいかに生き生きと表現できるかの方に重点があつたように見える。但し、当たり前のことを実践できるかとなると話は別である。「掃俗塵」には、「読万卷書行万里路」の修業が必要だったのであり、絵を描くこと自体が、「掃俗塵」の修行だったのである。

セザンヌが「自然の研究」によって見出した、自然の前で一切を忘れて「実現」する境地と、鉄斎が万里の路を踏破し、「掃俗塵」の修行によって切り開いた境地は、期せずして同じ地平にあつたと考えられる。ふたりの画家の絵に、同質の感動が宿る最大の由縁が、ここにあると考えられる。

次に、(2) 絵をどのように考えていたかであるが、二人とも、究極のところ、「人々の教えになる絵」を目指していた。

二人とも、絵画は美しいものを描くものではなく、真なるものを表現するものである、という信念を持っていた。セザンヌは、自分が知り得た真実は、絵で表現し伝える以外に、方法のないものであると考えていた。

鉄斎は、中国絵画伝統の勸戒主義を受け継いでおり、絵と賛によって真実を、人々に伝えようとした。「以画説法」である。こうした倫理性が、二人の絵の同質性に、関与しているものと考えられる。

次は、(3) 伝統をどのように考えているかであるが、二人は伝統重視という点で、極めて近い考え方を持っていた。とりわけ、セザンヌが、自分の仕事を、「プッサンを自然に即してやり直す」と位置づけていたことは、重要である。それは、西洋の伝統を、東洋的な自然観でやり直すことを、意味するからである。その仕事にこそ、セザンヌの美術史的意義がある。

石濤に私淑し、呉鎮の画冊を座右に置いていた鉄斎は、大陸の伝統思想や中国画論に深く参入し、それを日本的な器で統合することが、彼の画業そのものと言える程である。

セザンヌの言い方に倣えば、「鉄斎は、中国の伝統を、八百万の神々が宿る自然でやり直し、東洋の芸術として集大成させた」と言うことができる。

二人に共通して言えることは、自らの依って立つべき伝統を正面から受け止め、これを前に推し進めることが、そのまま彼らの強烈な自己表現であったということである。

次は(4)時流を顧みないということである。

両者ともに、時流を顧みないことよって、偉大な仕事を成し遂げ、結果として時代を創っているのである。鉄斎は西洋文明が津波の如く押し寄せる瀬戸際にあつて、東洋の伝統を集大成する最後の機会を、ものにする事ができた。セザンヌにしても、自然科学が不可避的に近代の芸術に影響を与え、分化、分解の方向に進む一歩手前で、「実現」という統一を果たしたと言うことができるのではないか。

最後に上げられる共通点は、(5)気質という言葉で表すことができる。それは、強く継続する力を、本源的に有する気質である。そして、その力は、自然と結びついて駆動するものである。二人の画家の作品には、何ものにも邪魔されることのない自己が現れており、同時に、何ものにも妨げられない自然が現れているように感じられる。そのような地点に到達するには、それを妨げる諸々との闘いがあつた、二人の画家に共通しているものは、そのような諸々を乗り越えて、並はずれた努力と研鑽を継続させ、自らの芸術の自由と独立を達成しようとする、そのような気質である。

二人とも、自己の内部に、原初的な力が駆動していると感じているのである。

これら5つの事項は、人物対比で偶然残つたように見えて、実は、セザンヌの本質を示しており、また鉄斎の神髄を示しているようにも思える。彼らの絵の、同質の感動に関与していることは、間違いないように思われる。

加えて、セザンヌの口癖であつた「タンペラマン」と鉄斎が求め続けた「気韻生動」を詳しく考察した結果、同質性の由縁が、更に明らかになつた。「タンペラマン」とは、人間の奥深いところにある気質を示す言葉であるが、セザンヌは、これを、自然と触れ合つてはじめて、動き出すものと、捉え直したことよって、気韻生動と同等の内容を示すことになつたと考えられる。人間の内奥にある自己と自然とが、響き合い、一体化して働くということにおいて、気韻生動も、セザンヌのタンペラマンも、本質を同じくすると考えられるのである。

結論は、セザンヌと鉄斎には、画家の本質的な部分に、共通するところがあつたが故に、彼らの作品に、同質の感動が宿つたということである。そして、その本質的な部分とは、伝統と自然に学び、俗なる自我を滅却し、自然と一体となつた自己を、実現しようとしたということ

である。

二、本論文の評価さるべき特色・意義

① 一読して感嘆させられるのは、周到に配慮された堅固な組み立てである。すなわち、先ず本論文の目的が、セザンヌの絵と鉄斎の絵、特に両画家の晩年の作品に見られる同質性の由縁を明らかにすることであると明記し、次いでその方法の主な部分がセザンヌの手紙の精読、鉄斎画賛の研究、作品の熟覧・模写であることを明記し、この方法の順序に従って、セザンヌの自然観、鉄斎の実像とくに自然観、そして両者絵画の同質性の由縁を解き明かしていく。見事な構成である。

② セザンヌの思想・人物を探るのに、セザンヌおよびその周辺の人々の手紙を第一の資料として選んだのは、他に適当な資料が見当たらなかったという事情があるにせよ、賢明な選択であった。論者はセザンヌ関係の手紙六十九通を四つの時期に分類整理して詳しく分析検討し、この時代、ヨーロッパ思想界に大きな影響を与えたと考えられるショーペンハウエルの哲学なども参照して、

まず、自然に直に接すること、次に、意志的な自我を消し去って、自分に固有のタンペラマンでその自然を感じることに、そして、その感覚を絵にすること

という東洋的境地にセザンヌが到達していく過程を詳細に論述していく。その描写はまことに鮮やかである。

③ 鉄斎の思想や人物を探るのに彼の画賛が中心の資料として取り上げられたのも賢明な選択であった。鉄斎は画論・書論の類を殆ど残していないけれども、おびただしい画賛を残していた。当然それらは鉄斎研究で重く取り上げられて然るべきであったのに従来の鉄斎研究ではそれが十分に為されていたとは言えない。それを妨げていた壁は、賛の解説の困難さにあった。先ず鉄斎の書の読みづらさとして「万巻の書物を読む」と自負する鉄斎の該博な学識を背景として書かれる賛の内容の理解の難しさであった。論者はしかし敢えてこの困難にいどんだ。鉄斎美術館が二十七年の歳月をかけて刊行した『鉄斎研究全 71号』がこれを助けた。論者は多くの画賛の中から鉄斎の「本音」が現れていると見られる百四十二点を抜き出し、更にその中から三十四点を選んで、一点ずつ克明に検討することによって

絵を描くことによって心の塵を払い、かくて高められた自己がはたらかき出して絵を描く。という「画道修行者」鉄斎の姿を浮かび上げさせてくる。これも見事である。

④ 論者はこのような作業を通して、二人の画家の作品に見られる内面的同質性について

セザンヌが「自然の研究」と称する修行の果てに見出した、自然の前で我を忘れて「実現」する境地と、鉄斎が、東洋思想が指し示すところを「万里の道を行く」実践で切り開いた境地は、期せずして同じ地平にあったと考えられる。両画家の絵に同質の感動が宿る最大の由縁がここにあると考えられるのである

と結論づける。両画家の作品に宿る親近性については、これまでブルーノ・タウト、瀧拙庵、小野竹喬、中川一政など、いろいろな人によって言及されてきたが、その親近性の中味をこのように明確に説得力をもって述べたものはかつて無かったと思われる。

⑤ 論者はまた、二人の画家に共通する地盤として、セザンヌが創作において欠くべからざるものとしてしばしば言及した「タンペラマン」と東洋画論において重んじられてきた、そして鉄斎も重視した「気韻生動」を取り上げ、

人間の内奥にある自己と自然とが、響き合い、一体化してはたらくということにおいて、気韻生動も、セザンヌのタンペラマンも、本質を同じくすると考えられる。ここにセザンヌに鉄斎が共通にする地盤が浮かび上がってくる。

とする。一見奇矯とも受取られそうなこの大胆な発言が逆に強い説得力をもって読む者に伝わってくるところに、本論文の勝れた特色の一つが現れているといえよう。

三、残された課題

論者が大学院の門を叩いたのは、論者の言によれば

思わず胸郭が押し開かれるような景色に出会い、これを表現しその作品が他者の胸郭を開かしむることができれば……
と考えて絵画制作を志したのである。その過程でブルーノ・タウトの

鉄斎を日本のセザンヌと呼ぶざるを得ない

という言葉に触発されて両者の比較研究をすることになった。その背景には論者が、セザンヌについては一九八〇年代から、鉄斎については大学院に入学してから、共感を抱くようになっていたことがある。論者はこの研究によって

西洋的なものと東洋的なものとをどのように把握してゆくべきかについて重要な示唆を得、今後の制作の方向が定着したと述べている。評者は、論者がいつの日にか、この研究によって至り得た新たな立場から、更めて、自他の「胸郭を押し開くような」作品

を創り出すのを待望する。論者はまた、

セザンヌの自然観が成立する必然性について、一旦古代あるいはそれ以前にまで遡って、そこから西洋の思潮を研究する必要が痛感された

と述べている。評者はこの方面に於て論者と共に研究できる日のあることを期待する。

本論文は全体として上述の如くすぐれた論文であり、今後への大きな期待を抱かせるものであるが、敢えて不満な点を挙げれば、セザンヌの手紙と鉄斎の画賛の検討において、今一步の踏み込みがほしいという、いわば隔靴搔痒の憾みを覚えるところがあつた。これは語学力の問題に関することで一朝一夕に解決できる問題ではないが、やはり一つの課題であろう。

四、審査結果の要旨

本委員会は、以上の如き観点から、本論文を、着想の獨創性、叙述の的確さ、構成の整合性などにわたつて精査した結果、全員の一致をもつて、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。